



月報

No.453
2018年
2月

日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『信じて帰って行った役人』

ヨハネによる福音書 4章43節～54節

小河信一 牧師

この4月初めに、私たちは復活祭（1日）ならびに教会創立40周年（2日が当日）を迎えます。私たちの心に、40年という節目を刻むことが、主の御心であると信じ、それにお応えしたいと願っています。この春、主が私たちを歓喜の礼拝へと導いておられるという希望を持って、準備を進めてまいりましょう。

新年にあたり、私たちに与えられたテキストの中心聖句を掲げます。順を追って説き明かしますが、「旅を続けなさい」という主イエスの言葉が含まれています。

ヨハネ福音書 4:50——

イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。

「帰りなさい」というのは、具体的には、ガリラヤのカナからカファルナウムへ「帰れ」ということです。英訳で‘Go your way’となっている通り、原意は「（渡し場などを越えて）旅を続けなさい」です。主が命じられた道を行け、というのは、まことに新年にふさわしい御言葉であります。

出エジプト後、40年経ち（申命記 29:4）、これからカナン^の地に入^{って}行^{こう}としている時に、モーセの後継者、ヨシュアに、同じような御言葉がくだりました。

ヨシュア記 1:2——

「わたしの僕^{しもべ}モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立^ってヨルダン川を渡^り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行^きなさい。」

「立^って」と「渡^り……行^きなさい」というのは、本来、二つの動詞の命令形です。すなわち、「立^ち上^がれ」と「渡^れ」です。新たな旅への出^発を告^げる、主の力強い命令です。その旅の最大の特徴は、「あなたがどこに行^ってもあなたの神、主は共にいる」（ヨシュア記 1:9）ということです。どこに行^{こう}とも、いつ進^みいつ休^{もう}とも、あなたの旅に「主は共にいる」、それはまさしく信仰の旅路です。

これこそ、教会創立 40 周年を迎えようとしている茅ヶ崎香川教会への神のメッセージではないでしょうか。

ガリラヤの王の役人に問われているのは、あなたの旅に「主は共にいる」、途中で失望せず（むしろ主に励まされ）、終わりを目指して「旅を続ける」ことです。決してあなたは独りではない、神が共にいましたもう、そして、あなたの先駆者にヨシユアがいる、ということです。幸いなるかな、この時の、王の役人の終着点・居住地は、カファルナウム（カペナウム）、すなわち、「慰め（ナホム）の村（ケファル）」と呼ばれている所です。ちなみに、「慰めの里」であるようにという願いを込めて、カペナウムはキリスト教系の病院や施設などの名称に用いられています。

ヨハネ福音書 4:47——

この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやしてくださるよう頼んだ。息子が死にかかっていたからである。

カナとカファルナウムとの距離がおおよそ 40～50 km であり、この物語に「きのうの午後一時に」（ヨハネ 4:52）という句が含まれていることから推察すると、この王の役人の旅は、二、三日のものでありました。

二、三日の小さな旅の中で、驚くべき事が起こりました。帰り道の途中に、そして帰り着いた時に、神の御業があらわされました。両方とも、王の役人の想像を超えたものでした。是が非でも主イエスを自宅へ連れて帰るといふ彼の初志が貫かれなかったにもかかわらず、です。文字通り、「わたし（神）の道は、あなたたちの道をわたしの思いは、あなたたちの思いを高く超えている」（イザヤ書 55:9）、です。

「イエスがユダヤからガリラヤに来られた」という幸いと「息子が死にかかっていた」という災いとが重なり合ったところで、王の役人の旅が始まりました。神からの幸いをしっかりと受け止めるのか、それとも、災いを解決することに気持ちが先走るのか、この人はいずれの道をたどるのでしょうか。

説教の本論に入ります。最初に、本日の旧約と新約との対応についてお話しします。

ダニエル書 3:32-33 は、ネブカドネツアル王の、神への告白またはしょうえい頌栄・讚美です。

新バビロニア帝国のネブカドネツアル王は、聖書的な評価はさておき、史実として、彼は「偉大なる王」です。帝国を治め（前 604—562 年）、南ユダ王国の攻略をはじめ領土を拓げることに成功しました。その人が、ユダヤ人のダニエルに出会い、二度にわたり、忌まわしい夢を解いてもらいました（ダニエル書 2 章と 4 章）。異邦人のこの「偉大なる王」が、ほんとうに力あるのは神であり、またバビ

ロニアではなく御国こそが永遠の御国である、と全世界に向けて布告しているのです。

ダニエル書 3:32-33 ネブカドネツアル王の諸国への挨拶——

32 さて、わたしはいと高き神がわたしになさったしるしと不思議な御業を知らせる。

33 この神のしるしは、いかに偉大であり
不思議な御業は、いかに力あることか。
その御国は永遠の御国であり、支配は代々に及ぶ。

非常に驚くべきことですが、ネブカドネツアルは、ダニエルの信じる主なる神の前に、ひれ伏しています。

クリスマスの説教の振り返りになりますが、私たちは、サウルーネブカドネツアルーヘロデ（大王とその子アンティパス）的なるものに、この世的に見栄えのするもの・権威あるものに、心が惹かれます。パウロの言う「人間の論法に従って」（ローマ 3:5）、私たちは自分や周りを見ようとします。そうして、自分自身の心の内で、罪と欲に駆られた「小さな王」が権力を振るい出します。

そうした中で、私たちが目を向けるべきは、あのネブカドネツアルの告白、偉大なのは自分ではない、主なる神なのだと言ったことです。そして実は、信仰を告白するネブカドネツアルの姿が、新約の登場人物「王の役人」と重なり合うのです。

ヨハネ福音書 4:46——

イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。

原文では、ヨハネ福音書 4:49 にもう一度、「王の役人」という呼称が出てきます。

「王の役人」という語は、元々「王」という語から派生したもので、「王の / 王に属する」というのが原意です。そこで、「役人」以外にも、王の「子ども」や王に属する「貴族」という選択肢もあります。

「王に属する」者は当然、王の支配や命令を支持する立場にあります。彼らは、自分の仕える王のやり方に熟達しており、それを遂行する責務を担っています。ということは、「大帝国の王」ネブカドネツアルと同様の問題が、ここに出てきます。

「王の役人」は現実には、主イエスが十字架につけられる頃のガリラヤの領主、ヘロデ・アンティパス王（在位 前 4 年—後 39 年 / ルカ 23:7-12 参照）に近い所にいる人物だった可能性があります。彼は、王のヘロデに忠実に仕えることが、生業なりわいでした。

王の役人が職務として、ヘロデを支えることは重要なことです。しかし、今問われているのは、信仰の上で、彼の人生の上で、ヘロデを王とするのか、それとも、主イエスを真の王とするのか、ということです。父なる神は、主イエスの前に、「王の役人」を召し出して、ひれ伏すべきは、地上の王・権力者ではなく、天にまします神であることを伝えようとしておられます。このような神の深い御旨のもとに、ネブカドネツアルと、この王の役人に、「しるしと不思議な業」(ダニエル書 3:32、ヨハネ 4:48) があらわされたのです。

それでは、ヨハネ福音書 4:43-54 を読んでいきましょう。

ヨハネ福音書 4:43-45 は、前段のサマリアの女との出会いから、後段のガリラヤ伝道へと至るつなぎの部分になります。

ヨハネ福音書 4:44——

イエスは自ら、「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはっきり言われたことがある。

この主イエスの言葉は、共観福音書(マタイ 13:57、マルコ 6:4、ルカ 4:24)にも出ています。しかし、ヨハネ福音書では「ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した」(4:45) という文脈の中に出ていますから、共観福音書に於けるように、「故郷」=ガリラヤの「ナザレ」では論旨がちぐはぐになります。

そこで、この場面でいう「故郷」は、主イエスが活動され、最後には十字架につけられた、ユダヤエルサレムとするのが、的確です。すなわち、主イエスがここでは憎まれ、殺そうとねらわれている(ヨハネ 5:16,18、7:1,7)、それがユダヤエルサレムという「故郷」なのです。

ただし、神の子、イエス・キリストが、「故郷」の激しい迫害を避けたというのは、適当ではありません。父なる神のご計画の中で、今この時には、主イエスはサマリアという異邦の地、そしてガリラヤという辺境の地で、さまざまな人に出会い、まことの信仰を教えられ、しるしを現されたのです。

主イエスが、このように異邦人伝道に取り組みされたということは、言い換えれば、すべての人に、全世界に福音を宣べ伝えようとしたということです。カファルナウムの「王の役人」という人物も、並行するマタイ福音書(8:5,8,13)では、ローマ軍の「百人隊長」になっています。

巧みにもヨハネ福音書は、第一のカナでのしるしから、サマリアでの働きを経て、今、第二のしるしへと続く過程で、徐々にイエス・キリストがどんなお方であるのか、私たちに教えようとしています。私たちはどうしても目が「しるしや不思議な業」の方に向いてしまいがちですが、主イエスは旅をし、宿をとり、そして立ち止まりながら、人々の生活に入り込んで(ヨハネ 1:14)、御言葉と御業をあらわされています。

ヨハネ福音書 4:50——

イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。

大ピンチに襲われた家の者が、「王の役人」(4:46,49)ではなく、ここでは、「その人」(ホ アンスローポス)と呼ばれています。本日のテキストの中心聖句とも言える主イエスの命令と宣言が述べられた時のことです。彼は、まさに一人の人間として、主イエスの「言葉を信じて帰って行った」のです。彼は、裸のありのままの人間として、主の前に立ちました。主イエスがその人に向かって語りかけられた、その御言葉を聞いて、その人は信じたのです。

言い換えれば、その人は、「王の役人」として、この世の王に仕えることを中心とする生活から解放され、王の王(ヨハネ黙示録 19:16)である主イエス・キリストに仕える者となったのです。彼が「帰って行った」というのは、今や、主イエスにつき従い、新たな思いで、人生の「旅を続けていった」ということです。

ヨハネ福音書 4:53——

それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。

「父親」という呼称が、ここで初めて登場しました。言うまでもないことですが、この人は「息子」に対しは、「王の役人」ではなく「父親」です。家庭に、親として振る舞わない「役人」がいたら、どうなることでしょうか。

父親は、本当に息子が癒されたということを知りました。病の子を案ずる親としての痛みや不安が取り去られたのです。

その人は、カファルナウムから迎えに来た、僕たちの「きのうの午後一時に熱が下がりました」(ヨハネ 4:52)という証言を信頼しました。主イエスが支配される不思議な出来事の中で、父親は息子のいる家に、まだ着いていないにもかかわらず、その証言を受け入れました。

ヨハネ福音書 4:48——

イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。

この主イエスの叱責は、「この神のしるしは、いかに偉大であり 不思議な御業は、いかに力あることか」(ダニエル書 3:33)というネブカドネツァルの神讚美と相容れないものでしょうか。

ここで、主イエスは「しるしや不思議な業」というものの、正しい受け止め方を、特に奇跡を欲してやまない人々に教えられたのです。それは、最初のカナのしるしでは、明確に示されていませんでした。

その受け止め方とは、しるし・奇跡というものの、背後にあって根源的なもの、すなわち、主イエス・キリストの言葉に、しっかりと耳を傾けるということです。ネブカドネツァルはダニエルの夢の解き明かしを、また、王の役人は主イエスの宣

言を、神の言葉として聞いた、それがすべてです。神の言葉を信じ、願わくは、しるしを与えたまえと祈る、それが正しい信仰の筋道です。

王の役人はしるしを乞い求めるばかりに、主イエスをカファルナウムに連れて来ようとはしませんでした。ただ「息子は生きる」とおっしゃるだけでなく、一日あれば、家に着きますから来てください、と言い返しはしませんでした。父親は疑えばかりのない状態ではありましたが、主イエスの言葉が彼を包み込んだのです。御言葉が、人の魂に下ったのです。

「あなた（または彼）の息子は生きる」（ヨハネ 4:50,51,53）と、主イエス・キリストが告げられました。十字架と復活の主の言葉です。「生きる」とは、「死んでも生きる」・「よみがえらされる」・「永遠の命を得る」ということです。

主イエスが私たちに求めておられるのは、「御神とともにすすめ……ゆけや、ゆけ」（讚美歌 I - 445 番）、「うたがい迷いの 闇夜について……われらは進む」（同上 385 番）ということなのです。

帰途の旅をする父親はなお気が気でなかったかもしれませんが、途中でもたらされた、主の御使いのような家の僕たちの証言に励まされました。そして、彼は当座の終着点である我が家にたどり着きました。

ヨハネ福音書 4:53——

そして、彼もその家族もこぞって信じた。

ハレルヤ、アーメン、インマヌエルなる主イエスと共に歩む旅路は、なんとすばらしいことか。息子の危篤のことしか頭になかった出発の時、それに対して、この到着の時の、なんと意外なことか、どれほど想像を超えたことか。

家族全員が、主イエス・キリストに救われてしまったのです（参照：使徒言行録 16:13-15,25-34）。主の御業が成し遂げられたのです。途中で苦しみがあり、仲違いがあり、しかし、それらを越えて行った時、主の大きな恵みが私たちに待ち受けています。

私たち、それぞれの家族もまた、問題を抱えていることでしょう。しかし、「その家族もこぞって信じた」と言います。そのことを私たちの祈りの課題にしようではありませんか。そして、茅ヶ崎香川教会という大家族に、キリストの体全体に、救いの力がゆき巡りますようお祈りしましょう。